

評価単位		評価のまとめ
I 保 育 課 程	1. 保育目標	○カリキュラムポリシーが3歳未満児の生活全般を捉えたものになっている。 ○子どもの姿、月、年間評価と反省と照らし合わせ、話し合い、見直しにつなげていく。
	2. 保育課程の編成	○保育指針を基に保育所の特色、子どもの発達、姿に即した保育課程の編成になっている。 ○研究テーマでもある「3歳未満児の表現」は保育実践が積み重なってきている。 ○保育課程は、引き続き、保護者開示型の写真記録に照らし、実践とのつながりを深めた作成を試みた。
	3. 保育日数・時間	○概ね就労・就学・研究時間に応じた保育時間となっている。就労・就学・研究以外の理由で利用している家庭については、9時～16時の時間内を基本とし、冬休み(12/25～1/8)・春休み(3/25～)の期間を設けた。 ○大学内会議などでの延長保育の利用が時々あった。 ○社会状況も考慮しつつ、今後も乳幼児期の成長に相応しい生活リズムを家庭と連絡を密にし援助していきたい。
	4. 保育内容と成果	○大学構内で歩く、走る、登る、降りる、跳ぶ等の運動機能の発達を促す活動を積極的に展開した。子どもの人数が少ない時など、安全性が保たれると判断した日には、教育の森公園など、学外への散歩も行い、高低差の多い地面を歩いたり、斜面上り下りなど身体を存分に駆使する経験を重ねた。 ○今年度も日常の保育の中で表現活動を行った。結果(できあがり)を問うのではなく、何が行われたように表現されたか、室内装飾として楽しむと共に、保護者にも共有できるよう、玄関等に掲示した。お散歩先で子どもたちが拾ってきたものを玄関に飾ることで、送迎時の保護者と子どもの会話のきっかけにもなっている。 ○職員間で日々、こまめにコミュニケーションをとり、保育内容の確認、変更等を柔軟に行った。 ○連絡帳、日誌、雑務に追われ、打合せの時間が取りにくいのが、極力計画的に短時間でも話し合うよう努めた。
	5. 行事	○伝統的な行事を知り、歌や簡単な製作を持ち帰ることで保護者と共有して家庭でも楽しめた。 ○3年ぶりに10月に「親子で遊ぼう会」を開催した。11月の大学祭の時には卒園児・在園児の同窓会を開催し、保護者同士の交流の場となった。感染症対策など昨年度の反省をもとに打合せを綿密に行うことで、安心・安全に行うことができた。子どもたちが普段食べているおやつを提供できたこともよかった。 ○保護者と十分にコミュニケーションが図れるように努めた。また、希望者対象で1日一家庭、一家庭1名限定で保育参加をアナウンスしたが、今年度希望者はいなかった。保育参観は3家庭の参加があり、子どもの遊んでいる姿を離れたところで見ながら保護者同士の交流の機会ともなっていた。0歳児だけではなく1・2歳児も、慣れ保育初日に、保護者と共に過ごしてもらうことで、ナーサリーの様子が伝わり、安心感を持ってたようである。子どもにとっても初めての場所で、保護者が一緒にいることで、安心して過ごす第一歩となった。
	6. 研究・研修	○ここ数年見送っている、他施設の保育者や研究者にも声掛けをして年に4回程度ナーサリー乳児保育実践研究会は今年も見送ったが、学内の先生に来ていただき、研究会を行ったり、附属幼稚園や文京区こども園との三園合同研究会に、常勤非常勤問わず、都合がつくスタッフは参加した。三園での研究会で話題になったことが、日々の保育にも活かされ、よい刺激となっている。園内では、アレルギー対応に関連した学習の機会やノロウイルスに関する再学習の機会を職員全員を対象に数回設けた。職員会議でも毎月の担当者を決め、日々の保育で興味を持っているテーマについて発表し、語り合う機会を設けた。 ○今年度の学会発表は見送ったが、一昨年まで継続してきた同僚性についての研究発表を5月の保育学会にて発表予定である。 ○対面・オンライン外部研修に参加した(子どもの文化学校)。東京都認可外施設向けの研修にも参加した。 ○他施設(こどもむら／にのり保育園／東京家政大学ナースリールーム)に見学に行ったことを職員間で共有し、よりよい保育環境・保育のために必要なことを語り合い、少しずつ形にしているところである。 ○今後も非常勤保育士を含め、保育を振り返り、研究を積み重ねていきたい。
A 大 学 の 保 育 所 と し て	1. 経営・組織	○2016(平成28)年度より利用を内部者に限定して4年目になるが、今年度も希望者全員を入所時期・登園回数いづれにおいても希望通り受け入れた。しかし、昨今の状況(少子化・待機児童減少)により、教職員や学生の入所者が極めて少ないため、今年度も施設長判断で、文京区在住の1・2歳児を数名受け入れている。学内関係者は年度途中入所が多いため、必ず入れる枠を留意しながら、地域枠の可能性を規約改訂も含め具体的な検討に入っているところである。 ○月に1度程度、非常勤職員も交えての全員職員会議を開催している。事務連絡はできるだけ前日や日中に分散で行い、主に保育の話をできるようにした。常勤会議やクラス会議などは行ってないが、都度都度時間を見つけて話せる時間を大切にしたい。今後も、仕事内容の連絡、連携に努めていきたい。
	2. 出納・整理	○昨年度までは主任保育士と非常勤が協力して経理にあっていたが、今年度は主任保育士が保育に入らなければならない時間が多く、非常勤が主に経理事務を担当してくれている。しかし、事務中心の非常勤も調理や保育に入ることもあるため、時間のやりくりを工夫しながら附属学校課のサポートのおかげで何とかこなせている状態である。連携して円滑に行っていきたい。 ○光熱費や食材の高騰や園児数の増加により、削れない出費が増えた。10年ものの家電製品が次々と壊れている中、今後の出費も懸念される。今後も運営費の使途についても計画的に進めるよう努めていく。
	3. 施設・設備	○大塚宿舎改修による現園舎が15年目に入り、乳児保育施設としての不十分さや経年劣化は否めないものの、大学内施設担当に相談して細やかに修理や不具合に応じていただいている。インターネットケーブルの老朽化により、時々つながらなくなってしまう不具合が生じているが、そのたびに情報処理センターに応急処置をいただいている。今年度の補正予算で修理していただく予定である。
	4. 健康	○お便りで健康に関する情報を載せたり、感染症が出たときは、迅速に保護者に伝えた。 ○感染症やその他、疾病の発症を防ぐため大人・子どもの手洗いの徹底、おもちゃの消毒等、職員保護者の共通理解に努めた。 ○園に看護師がいなくても、怪我や病気の時に幼稚園の養護教諭やこども園の施設長・看護師に相談できる環境が本場にありがたかった。 ○アレルギーの子どもへの配慮を徹底した。更に緊張感をもって日々食事の援助をする。 ○三大食物アレルギー除去のおやつを引き続き実施した。
	5. 安全	○毎月の避難訓練での反省を次に活かし、1歳児2歳児とも訓練が身につくように保育士の指示に従い、落ち着いて行動している。図上訓練も行うことで備蓄品を確認して必要な物の検討ができた。 ○事故、怪我が起こった際は再発防止策を話し合い、全職員の共通理解と環境整備に努めた。 今後も安全、安心な保育所を目指していく。
	6. 開かれた保育所	○微音祭に合わせて行ったナーサリー同窓会は、参加者が多く近況報告や子育ての情報交換、交流の場となった。卒園、転園した親子が戻ってくる場として定着してきている。引き続き定例開催していきたい。
II 保 育 所 運 営	1. 経営・組織	○2016(平成28)年度より利用を内部者に限定して4年目になるが、今年度も希望者全員を入所時期・登園回数いづれにおいても希望通り受け入れた。しかし、昨今の状況(少子化・待機児童減少)により、教職員や学生の入所者が極めて少ないため、今年度も施設長判断で、文京区在住の1・2歳児を数名受け入れている。学内関係者は年度途中入所が多いため、必ず入れる枠を留意しながら、地域枠の可能性を規約改訂も含め具体的な検討に入っているところである。 ○月に1度程度、非常勤職員も交えての全員職員会議を開催している。事務連絡はできるだけ前日や日中に分散で行い、主に保育の話をできるようにした。常勤会議やクラス会議などは行ってないが、都度都度時間を見つけて話せる時間を大切にしたい。今後も、仕事内容の連絡、連携に努めていきたい。
	2. 出納・整理	○昨年度までは主任保育士と非常勤が協力して経理にあっていたが、今年度は主任保育士が保育に入らなければならない時間が多く、非常勤が主に経理事務を担当してくれている。しかし、事務中心の非常勤も調理や保育に入ることもあるため、時間のやりくりを工夫しながら附属学校課のサポートのおかげで何とかこなせている状態である。連携して円滑に行っていきたい。 ○光熱費や食材の高騰や園児数の増加により、削れない出費が増えた。10年ものの家電製品が次々と壊れている中、今後の出費も懸念される。今後も運営費の使途についても計画的に進めるよう努めていく。
	3. 施設・設備	○大塚宿舎改修による現園舎が15年目に入り、乳児保育施設としての不十分さや経年劣化は否めないものの、大学内施設担当に相談して細やかに修理や不具合に応じていただいている。インターネットケーブルの老朽化により、時々つながらなくなってしまう不具合が生じているが、そのたびに情報処理センターに応急処置をいただいている。今年度の補正予算で修理していただく予定である。
	4. 健康	○お便りで健康に関する情報を載せたり、感染症が出たときは、迅速に保護者に伝えた。 ○感染症やその他、疾病の発症を防ぐため大人・子どもの手洗いの徹底、おもちゃの消毒等、職員保護者の共通理解に努めた。 ○園に看護師がいなくても、怪我や病気の時に幼稚園の養護教諭やこども園の施設長・看護師に相談できる環境が本場にありがたかった。 ○アレルギーの子どもへの配慮を徹底した。更に緊張感をもって日々食事の援助をする。 ○三大食物アレルギー除去のおやつを引き続き実施した。
	5. 安全	○毎月の避難訓練での反省を次に活かし、1歳児2歳児とも訓練が身につくように保育士の指示に従い、落ち着いて行動している。図上訓練も行うことで備蓄品を確認して必要な物の検討ができた。 ○事故、怪我が起こった際は再発防止策を話し合い、全職員の共通理解と環境整備に努めた。 今後も安全、安心な保育所を目指していく。
	6. 開かれた保育所	○微音祭に合わせて行ったナーサリー同窓会は、参加者が多く近況報告や子育ての情報交換、交流の場となった。卒園、転園した親子が戻ってくる場として定着してきている。引き続き定例開催していきたい。

			○国内外の保育園幼稚園保育者養成大学からの視察を受け入れ、積極的に意見交流を行った。
		7. 情報	○個人情報、経理関係のデータが流出することのないよう保管方法を工夫している。今後も危機感をもって扱うことを徹底したい。 ○附属学校課に協力していただき、HPの内容を更新中。保育内容についてのページは、ほぼ改修を終えることができた。その他(利用申し込みの手順など)の箇所も、見やすい、伝わりやすいホームページを目指し改修していく。 ○今後も個人情報の管理、保育写真の管理を徹底する。
		8. 保護者との連携	○10月と3月の土曜日に行ってきた親子で遊ぼう会を実施した。○2017年度に開始し定着してきた「いずみナーサリーの日」(保護者との自由昼食と談話の会)は昨年度に引き続き今年度も実施を見送ったが、年2回の保護者会に加え、子どもたちが遊んでいる様子を撮影した上映会や保育参観を実施した。年2回の保護者会も回数を分け、時間帯を複数用意したが、仕事をしている家庭にとっては、保育時間内に実施することが参加しづらい面もある。一方で土曜開催にすると、近隣以外の家庭にとっては負担が増すことへの懸念もある。どのような形で保護者同士が交流する機会をもつことが望ましいか保護者の意見も聞きながら柔軟な運営を今後も検討していきたい。 ○個人別のポートフォリオを作成、月ごとに更新し、保護者に手渡した。保護者からのコメント欄があり、そこに記入して返却してもらっている。本人のものは持ち帰りが可能で、他児のものも相談室で閲覧可能としたが、相談室が物置と化しており、機能していない。個人面談では使用しているが、その他自由にほんの少しの時間でも保護者がくつろぐことができる場にしていきたい。 ○保護者交流・保護者との連携の機会を多くを見合わせ、日々の送迎時の直接のやりとりを平年以上に丁寧にまた十分に行うよう心掛けた。○今後も、保護者が気兼ねなく相談等もちかけられるような体制を継続すると共に、日常的に保育を伝え、子ども理解と信頼関係を築くよう努める。
		1. 連携研究	○学部3年生のインターンシップ3名を受け入れた。1名はインターンシップが終わった後も、不定期にボランティアとして来てくれており、卒論の協力をした。
		2. 連携企画	○年2回の保育所専門委員会において、大学との意見交換を行った。学内乳幼児保育の場であるいずみナーサリーの存在、子どもの存在を大学内に伝え共有する手立てを考えていきたい。学内周知のため、附属学校課の協力をいただき、掲示板にポスターを貼ったり、お茶メールで情報発信しているが、その他の手段も模索していく。
3. 授業交流	○「宋襄公の「セリク論」の授業で3歳未満児の発達や生活について講話を行った。コロナ禍により実施を見送っていた履修生による保育参観も今年度より再開した。実際の子どもの姿を見ることができるとは学生にとってもよかったようである。また授業後の課題制作では小さい子がいる家庭向けの簡単にできるレシピを作成してもらい、保護者にも好評であった。 ○『子ども学フィールドワーク』で学部生の観察を受け入れ、観察後には振り返りを行い、振り返りの会にも参加した。		
B 大学 の 附 属 学 校 園 と し て	I 大 学 と の 連 携	4. インターンシップ・ボランティア	○子ども学コース3名のインターンシップを受け入れた。○学生サークルOchasによるボランティアを再開した。週に1回のおやつ作りも軌道に乗り、子どもにとっても学生にとってもよい機会となっている。新しいおやつメニューの企画にも積極的に、新たに取り入れて定着したメニューもある。今後も安全面には十分気を付けながら、学生がやりがいを感じるができるよりよいボランティア活動の在り方を探っていく。また、同時に学生の活動を保護者に伝える方途を探っていく。Ochas以外のボランティアについては、今年度希望が無かった。
		5. その他	○男女共同参画担当との協働により、2017年度から継続して休日の通常授業開校日に臨時保育室としてナーサリーを開室した。加えて、今年度より複数の入試日についても臨時保育室を開室した。普段は居住地域の保育園に預けている学内関係者が、我が子を働く場所に連れてくる意義も感じられた。初めてナーサリーに入ったという保護者も複数いらっしや、小さな子がいる教職員にとって、子どもを預ける以外の何か情報発信ができるとよいのかかもしれないと思った。(ナーサリーにある絵本の貸し出しなど、入るきっかけになるようなもの)
		6. 見学者の受入	○大学の先生経由での見学希望があった。直営の大学内保育所、利用日数選択型保育所として今後も積極的に見学を受け入れ大学直営保育所の良さを発信していきたい。こども園に見学に来た方が併せてナーサリーを見学する機会が複数回あった。こども園の先生がナーサリーも併せて紹介して下さることもありがたい。
		7. 他機関との連携	○国立大学関連社会福祉法人理事長園長会は東北大学関連法人の主催でオンラインによる状況報告、意見交換、交流を行った。
		8. 地域貢献	○地域親子向けの子育てひろば「いずみナーサリーで遊ぼう会」(2018年度に不定期に開催開始、2019年度は定期開催、2020年～2022年休止)は今年度7月より再開した。ホームページでの広報と近隣の図書館にチラシを置かせてもらい、月1回のペースで開催している。1回5組までの小規模な会であるが、一度参加した親子がリピーターになって下さることも多い。子育てに関する相談を受けたり、当日参加できずとも、メールでの相談を受けることもあり、極微力ながら、地域貢献につながっている。また外部からの入園問い合わせ等での見学時に育児相談になることも多かった。保育時間等の条件で直接利用にはつながらないが、何か困ったときに聞ける場所の1つとして機能しているところはある引き続き、地域の子育て支援についてよりよいあり方を模索していく。
	II 社 会 貢 献		
	III 地 域 貢 献		

令和5年度 いずみナーサリー評価(自己評価)まとめ (課題)

< 保育課程 >

- 子どもの姿や保育を振り返り、クラスを越えて保育士が連携をすることで柔軟な保育を展開することができた。
- 乳児保育の独自性(高い個別性、成長著しい時期のため理解の固定化が不可能)と集団生活の中で育つ意義の両義性を発揮できた。
- 今後も子どもの姿に応じた利用日数選択型の柔軟なかつ安定的な異年齢保育を目指す。

< 安全・環境 >

- 災害時の想定に様々な場所、時間帯を設定し、訓練することで安全な避難の仕方や必要な物を確認した。
- 遊び場、生活の場の整備、食事提供の仕方、アレルギー食の配慮、感染症予防等、安全の徹底を図った。
- COVID19に限らず感染拡大防止のため、入室時の手洗い、検温、施設内の換気、消毒、玩具・教材の殺菌消毒を徹底した。子どもは感染症にかかりながら丈夫になる。神経質になりすぎず、かつ正しく恐れ、乳児期の健康について保護者と共有していく。

< 大学との連携・研究 >

- 人間社会科学科子ども学コース、食物栄養学科の授業への関与、連携は定着してきている。子ども学コースの学生は2年次後期のフィールドワーク実習で初めてナーサリーの存在を知る学生も多い。ナーサリーは女子大学の中にある学生・教職員のための保育施設であり、学生の今後のライフワークにも関わりがありうる施設として、周知方法等も含め、大学の先生方とも連携をとりながら考えていきたい。(卒業生の利用も含め)

< 他機関との連携・研究 >

- 国立大学法人関連保育所理事長園長会の年次大会はオンライン会議およびメール・電話でのやりとりをすることで情報交換・交流を続けることができた。次年度は実際に他大学の保育施設への見学・視察も実施していきたい。